

広潤天地へ飛ばされた知識青年たち

— 中国・文化大革命期における人的流動と社会主義権力の表象

静岡大学 大野 旭(楊海英)

1. 序文

1955年秋、毛沢東は「農村は広潤な天地だ。あそこで大いに活躍できる」、という「最高指示」を出し、社会主義時代における都市部の知識青年たちを農村へ動員させる金科玉条となった。以来、1950年代から1970年代末にかけて、およそ四半世紀にわたって、合計約1,700万人の都市部の知識青年(モンゴル語名: sekegeten)たちが農村・牧区へ動員、移住させられた(劉 1998; 定 1998)。これと同時に、農村部に生まれ育った知識青年たちも「回郷知青」と位置づけられ、都市部への就職のチャンスを永遠に奪われた。人類史上、希に見る大規模な人的移動であると同時に、稀有な閉鎖政策でもある。

では、なぜ、これほど大規模な人的流動を毛沢東の社会主義中国は決行したのか。「大躍進」など経済の過熱化(実質上は巨大なマイナス成長だったが)で農村部に労働力不足の現象が生じ、同時に、都市部の膨大な未就職人口を解消するためだった、という説がある。しかし、1957年の「反右派闘争」の直後だったこと、中国各地の「反革命反乱」の鎮圧後だったこと、などから考えると、都市部の反社会主義的とされる人々を除外しようとした目的も隠されていたのではなかろうか。

1966年、毛沢東は劉少奇らの政敵を倒すために文化大革命を発動した。政敵らを直接暴力で打倒したのは、紅衛兵とよばれる青年たちだった。やがて、政敵もすべて粛清されたあと、無用となった無数の紅衛兵たちも知識青年と称されて遠隔地へ流された。

1960年代後半、都市部の知識青年たちの農村への動員は雪だるま式に膨張していった。理想に燃え、凌雲の壮志を抱く者もいたが、どちらかという、都市部において、その父母らが何らかの「罪」で打倒されていた人たちの子弟が多かった。彼らの一部は都市部での不遇を農村・牧区に住む「階級の敵人」に転嫁させ、これを「革命の伝播」と呼んだ。農村・牧区は知識青年たちがもたらした「革命的闘争方式」によって、古くからの伝統が大きく破壊された。

毛沢東の死と同時に終息した文化大革命であるが、下放されていた知識青年たちが都市部に戻る道のりは長く、困難に満ちていた。中でも、新疆生産兵団や雲南のゴム工場などに展開されていた青年たちは、1980年代末になっても、まだ帰郷の道が閉ざされたままだった。

農村・牧区にやってきた知識青年たちは、「再教育」を受けるために現地人との通婚が奨励された。彼らはさまざまなる思想を持ち込み、新しい人間関係、民族間関係が結ばれた。約20数年たった現在、彼らの一部は下放先を「煉獄」や「悪夢の根源地」と見なし、別の一部は「第二の故郷」と見ている。なぜ、このような認識上のひらきが生じたのだろうか。

いまの中国を動かしているのは、かつての知識青年たちの世代である。彼らの国家運営と国際世界との接触にも、当然、下放時代に形成された人生観が反映されているはずだ。また、1960年代の世界は各種多様な学生運動に席卷されていた。都市部から農村へ、という人的移動(強制移住)も、各国で見られる。今一度、中国における社会主義時代の人的移動を世界史の中で再認識する必要がある。

2. 革命は首都から

2-1) 革命の嵐のなかの軍隊化

「司令部を砲撃せよ」(砲打司令部)、という毛沢東の大字報で文化大革命は1966年夏からはじまった。毛沢東の支持を受けた紅五類出身者(革命幹部、革命軍人、革命烈士、工人、貧農)からなる造反派紅衛兵たちは「革命の種」を国中にまくために、全国を歩きまわる「大串聯」運動を牽引した。毛沢東は「大串聯」してきた紅衛兵たちに、天安門の城楼から「我支持你们」とのメッセージを送り、運動は高潮を迎えた。やがて、このような空前の人的移

動が大混乱をもたらしているとみた党中央委員会は、「大串聯」を規制する方針に転換した。1967年3月、またもや毛沢東の指示を受けて、「軍訓団」や「軍宣隊」と称する解放軍が大学、高校、中学校に入って軍事管理を実施した。教研室やクラスを超えて、学生たちは連隊や排(小隊)に再編成された。「早請示、晚汇报」、「活学活用毛主席著作」といった「複課鬧革命」が導入された(劉 1998:104-105)。

当時、政治的な混乱によって大学は実質上学生の募集を停止し、工場や企業も生産活動がストップしていたため、1966年と1967年の卒業生たちは無職のまま「革命」をしていた。1968年に入ると、都市部の3年間の各種卒業生、つまり「老三届」とよばれる青年たちは1000万人に膨れあがっていた(劉 1998:105-106)。このような革命精神に燃え、エネルギッシュな青年たちをどういう方向へみちびくかは、党中央政府の頭痛のねたになっていたし、各種政治勢力にとってつごうのいい利用対象でもあった。

2-2) 曲折からの序幕——草原へ飛んだ赤い鷹

文化大革命がはじまったあと、首都北京には無数の紅衛兵組織が林立していた。北京市第二十五中学の曲折は「東風」という造反組織のリーダーだった。やがて、劉少奇派の工作組が学校に進駐し、曲折派は「反党分子」と断罪され、監禁生活をよぎなくされる。しかし、1967年7月18日に地方視察から北京にもどった毛沢東は曲折らを「革命左派」ともちあげた。「曲折を解放したのは毛沢東だ」、という強力な後ろ盾を得た彼らは、積極的に政府の革命路線に協力するようになる。彼らの一派は北京市革命委員会の接見をうけるなど、急先鋒を演じる役が与えられた(劉 1998:110-112)。

曲折自身は当時、紅衛兵たちをまとめて新疆ウイグル自治区あたりで「紅衛兵大学」のような組織をつくりたかった、と回想している。その後、新疆よりも内モンゴルの方が革命委員会を形成するなど、文革の先端を走っていたことから、内モンゴルへ行くことを彼らは選んだ。かくして、1967年10月9日、曲折をはじめとする10人の北京市の青年男女は天安門広場で毛沢東の巨像に向かって宣誓をおこなった。

毛沢東思想で全世界を赤く塗りつくすという大事業のため、刀の山に登ろうと、火の海に入ろうと、喜んで行きます!

貴方(毛沢東)が出された知識分子と労農が結合せよ、との偉大なる指示にしたがい、第一歩を私たちは踏み出した。私たちはこの革命の道を最後まで行きます。二度と引き返しません!

このような言葉をとどろかせて、彼らは内モンゴルのシリングル草原を目指した。当時の『紅衛兵報』は彼らを「草原に雄飛した鷹」と表現していた(劉 1998:110-113; 同 2004:56-124)。曲折は草原生活をへて、1973年11月から内モンゴル自治区の統治者で、北京軍区司令官・内モンゴル自治区革命委员会主任の尤太忠の秘書を五年間つとめるようになる(劉 2004:107)。曲折らが天安門広場でおこなった儀式はそれ以来ずっと、紅衛兵たちが上山下郷するときの通過儀礼となっていた。

3. 南京、「革命老将」の先を行く「革命小将」

では、南京の知識青年たちは首都北京の革命運動をいかに理解し、どのように動いたのだろうか。以下では主として南京の知青たち自身の回想録『忘れがたきオールドス』(『難忘鄂爾多斯』1993)内の記述から彼らの内モンゴル自治区のオールドス地域へのみちのりをたどってみたい。

3-1) 大草原を魚米の郷にしよう、という有志

『忘れがたきオールドス』にある黎亜明の文は、南京の知青たちがオールドスに赴くことになった経緯を詳細にまとめている(黎 1993:3-6)。

南京市第九中学の黎亜明、李兵、華沙などは、1968年8月上旬から北京の知青たちが内モンゴルへ上山下郷に行った記事をあつめ、ひそかに準備をはじめていた。彼らはいろいろと相談しあったあと、8月20日の昼に「決心書」を書いた。それは次のように書かれていた。

偉大なる領袖毛沢東がおおぜいの青年たちに出した「農村に向かい、辺疆に向かい、工業・鉱区に向かい、末端に向かい」という「四つの方向に向かう」(四個面向)の呼びかけにこたえるため、「農と結合する道を動揺せずに行くため、私たちが内モンゴルの辺疆に行って定住することを許可してほしい。もっとも苦しいところ、もっとも私たちが必要とするところに派遣してほしい。工農大衆のなかに根をおろし、革命の先

輩たちの光栄なる伝統をうけついで、自らの両手で、一生懸命に働いて、広大な内モンゴルの草原を豊かな魚米の郷に改造する。

この決心書には黎亜明、李兵、華沙、林聯勤、呉大同など計12人の青年が署名した。一同は決心書を七部書き写して、地図のうえからみて沙漠の多い内モンゴル自治区オルドス地域のオトク旗、ウーシン旗、アラシャン左旗、アラシャン右旗、スニト左旗とスニト右旗などに送った。

翌日、彼らはまた決心書を大きな赤い紙に写して大字報のかたちでキャンパスの壁に貼った。当時、学生たちの多くは「武闘」に厭きており、辺疆へ行こう、という呼びかけは好意的に受け止められた。

決心書を内モンゴルへ送ったとはいえ、地元南京革命委員会の支持がなければ実現できないのも分かっていた。そこで、彼らは8月23日に南京市五台山体育場で群集大会が開かれ、南京市革命委員会の主任で、許世友將軍が出席するとのニュースを聞いて、その機会にアピールすることを決めた。会議の日、黎亜明と呉大同の二人は解放軍兵士の仲介で決心書を許世友に渡すことができた。

翌8月24日の午後、黎亜明ら第九中学の学生代表と第二女子中学の代表張曉芳、南京師範学院附属中学の代表らとともに、南京市革命委員会幹部と6384部隊政治委員の彭勃らの接見を受けた。彭勃から「革命の小將たちは老将よりも先に行っているな!」、と褒められた。彭勃はつづいて自身が国民党軍と戦った「革命の経験」を熱く語ったあと、「内モンゴルは苦しいところだ。十分思想的な用意をしてから、革命の先輩たちの仕事をひきついで、もっとも困難の多い地域に行こう」、と指示した。

内モンゴル自治区のアラシャン右旗やスニト右旗からの返事は電報のかたちで8月25日と26日に届いたが、青年たちの革命の意思を称賛しながらも、受け入れるとは書いていなかった。いささかがっかりしたが、翌27日のオルドス地域オトク旗からの電報はまったくちがう内容だった。電報には次のように書いてあった。

南京第九中学聯委:

林聯勤、呉大同、黎亜明など計12人の紅衛兵の小將らが偉大なる領袖毛主席の呼びかけに応じて私たちの旗に定住(安家落户)に来たい、という趣旨の手紙を受け取った。われわれは貴方たちを熱烈に支持する。貴方たちと同じような思想をもつ卒業生の青年たちがわが旗に定住に来るのを熱烈に歓迎する。オトク旗は牧畜業を主とするところで、面積は広く、人口は少ない。生活は苦しいだろうが、前途は明るい。大勢の貧農・貧牧たちは貴方たちと一緒に毛沢東著作を学び、毛主席の最新指示を実施し、プロレタリアの文化大革命が全面的な勝利を得られるよう、と渴望している。手続きを終えたら、電報で知らせるように。

内蒙古オトク旗革命委員会 1968.8.27

数日後、オルドスのウーシン旗からも受け入れの電報が届いた。南京市革命委員会とオトク旗・ウーシン旗との交渉の結果、500人の青年が派遣されることになった。しかし、内モンゴルへ知識青年を派遣するとのニュースは瞬時に南京市に伝わり、第三女子中学、第三中学、第四女子中学、寧海中学、二十五中学、二十六中学などからも志望者が殺到した。志望者たちは厳しい「政治審査」を経て選ばれた。

3-2) 行動派申聯組の知識

南京知青のひとり、戴佐農も発起人を自認している。彼は次のよう回想している(戴 1993:7-11)。

北京や上海、それに天津とちがって、南京市には「辺疆支援」を目的とした知青の下放任務はなかった。それでも、南京の知青たちの行動は江蘇省政府と内モンゴル自治区政府の支持を得て実施された。運動は主として南京師範学院附属中学、南京市第九中学、南京市第二女子中学などの学生らが中心となって発動したものである(戴 1993:7)。

1967年の南京市は大規模な「武闘」で憂鬱な状態に陥っていた。棍棒や槍のまえて、学生たちの弁舌は無力になっていた。「軍宣隊」による軍管後も、いわゆる「複課鬧革命」は有名無実だった。そうした中、自分たちの革命の方向はおのずと示されていたようになった。というのは、すでに1964年、つまり初期上山下郷運動のとき、南京市第九中学から黄桂玉という人物が大学よりも農村行きを選んだため、「南京七十二賢人」と宣伝されていた。上山下郷は、唯一の道だった。

戴佐農は1967年に徒歩で革命聖地の延安まで大申聯した経験をもっていた。延安についた彼は、その北に隣接するオルドス草原の存在を知っていた。そこで、戴佐農は同志の張三力、向家徳、余本仁、杜紅月、謝鴻雁、

王燕玲らによびかけ、九人が連名で内モンゴル自治区革命委員会に上山下郷の意思をつたえる手紙を書いた。内モンゴルを選んだ理由は三つあった。

第一、内モンゴルはすでに北京市などの知青たちを積極的にうけいれていた。

第二、同志の杜紅月のオジ、高錦明¹⁾は内モンゴル革命委員会の副主任をつとめていたから、その力を借りたかった。つまり、実現可能性が高かった、と判断した。

第三、中ソ関係が悪化していた時代で、両国間の衝突はもはや避けられない可能性が高く、自分たちは革命闘争・反ソ連修正主義の最前線に立ちたかった。

そこで、戴佐農と余本仁は直接、文学作品によく現れる内モンゴル東部の「ホルチン草原」に入って偵察し、杜紅月と謝鴻雁らは内モンゴルの首府フフホト市に行って、オジの高錦明に会って支持を獲得しよう、と二道に分かれて行動した。8月、戴佐農らはホルチン草原に入り、熱烈な接待を受けながら、国境を挟んでモンゴル人民共和国を眺めてから8月下旬に南京市もどる。一方、杜紅月と謝鴻雁らはフフホト市でオジの高錦明らの支持を獲得する。

戴佐農らとほぼ同じ時期に、南京市第九中学の十数名の学生たちが内モンゴル自治区の各旗に手紙を送って、知青のうけいれをさがしていた。しかし、返事がかえってきたのは、オルドスのオトク旗とウーシン旗だけだった。

4. ある南京知青の語り

内モンゴル自治区西部のオルドス市オトク旗の政府所在地はウラーンバラガス鎮にある。町の中のある信用組合の建物を私は2005年8月22日に訪ねた。信用組合の主任、梁麗蓉(2005年当時55歳)にインタビューするためだった。信用組合のモンゴル人に梁麗蓉の名を聞くと、「あっ、チャガン・ソプトだね」といわれた。彼女は漢名よりも、モンゴル名チャガン・ソプトの方が知られているようだ。チャガン・ソプトとは、「いい真珠」との意味で、モンゴル人女性特有の名前だ。

私は梁麗蓉ことチャガン・ソプトとともに彼女の自宅に行った。夫のゲシクダライ(56歳)は庭の中の盆栽に水をやっていた。二人は1970年に結婚し、一男一女をもうけた。子どもたちはみなモンゴル語で教育をうけ、モンゴル族の籍をとっている。そのうち男の子は現在、オトク旗の牧畜民となっている。

梁麗蓉は南京知青の中でも、地元モンゴル人と結婚した数少ない女性のひとりである。ほとんどの南京知青たちが「回城」、つまり都市部にもどったあとも、ずっと下放先にとどまって暮らす少数派のひとりでもある。そのため、私が彼女に過去を語ってもらったのである。以下は、梁麗蓉の語りである。

4-1) 上山下郷を選んだわけ

梁麗蓉の本籍は北京市である。祖父は医者だったが、社会主義中国では「臭老九」とされ、不遇の毎日を送っていたことから、労働者となっていた父母は3歳の梁麗蓉を連れて南京市へ転勤した。それ以来ずっと南京市で暮らした。南京市秦淮区にある荷花堂小学校、第十九中学を経て、名門南京市第五中学(高校)を1967年に卒業した。

高校を卒業した当時、南京市は混乱に陥っていた。中でも特に第五中学は「武闘」の主要勢力のひとつだった。父母と祖父らは引退して北京にもどっていたが、梁麗蓉は北京に行かずに、同志たちと一緒にいる道を選び、学校に寝泊りしていた。全国的情勢と同じように、南京市の紅衛兵たちも「兩派」に分かれた。「827師」と「紅総」という二つの派閥だが、「827師」は「保皇派」、「老保派」で、「紅総」は造反派だった。当時、約3000人の生徒がいた第五中学は造反派の「紅総」が権力を掌握していたため、「保皇派」の梁麗蓉は批判闘争の対象とされた。学校内に軍宣隊が進駐し、「複課鬧革命」がはじまっていたとはいえ、実質的には授業らしい授業はまったくなかった。

就職もできる企業はなかった。工場はすべて生産活動が停止していた。自分も友人たちもいつ、「打倒」されるか分からない。今日の友は明日に敵になるかもしれない、というような日々がつづいた。南京市にとどまっただけでは、将来がない、とみんなで話しあうようになった。学生たちは、全国各地へ出かけて大い¹⁾聯をおこない、「革命の先輩」たちの偉業をみならうというのが歌い文句だったが、実際は、どこか個人に適した桃源郷を探そうという人も少なくなかった。しかし、当時の中国に桃源郷はどこにもなかった。南京市の紅衛兵の一部はどうやら、オルドスの近くまで行ってきたいとのニュースが伝わり、内モンゴルの大草原への憧れは膨れ上がった。

内モンゴルへの上山下郷が決定されたとき、梁麗蓉が卒業した南京市第五中学には50名が割り当てられ

た。1968年10月21日、1061名の知識青年たちが、蚌埠列車段の用意した専用列車で南京市西站をあとにした。駅は泣き声に包まれていた。1000名は市革命委員会が決定した枠だったが、61名は無理して列車に乗り込んだりした人たちだ。

専用列車は、暖かい南中国の大都市を離れ、24日にオルドス北部の海勃湾(モンゴル語名: Qayibur-un Toqai)に着いた。海勃湾は黄河をまたがってできた工業都市で、内モンゴルはすでに冬の季節を迎えていた。

解放以前の「旧中国」時代に医者になっていた祖父をもっていたため、ずっと、いじめにあっていた。医者は工・農・兵のような「良い出身」の類ではなかった。成績がよくても、大学に入れる見込みはなかったが、それでも梁麗蓉はめげずに努力した。1966年に文化大革命がはじまると、大学に入る夢は泡に化した。「大学どころか、命も保証されない毎日だった」ため、彼女は、内モンゴルの草原に希望を託したのである。内モンゴルにも同じように文革の嵐が吹き荒れていたことは、知らなかった。

4-2) 軍事組織の再分配

南京の知青たちは、中隊(連)や小隊(排)のような軍事組織にもとづいてまとめられていた。ひとつの中隊はだいたい100~123人からなり、梁麗蓉は第十九中隊第二小隊に組みこまれていた。このとき、彼女は18歳になっていた。

海勃湾にはオルドスのオトク旗革命委員会からの歓迎隊が来ていた。盛大な歓迎式のあと、一行はオープントラックに分乗して、寒風の中のオルドス高原に入った。青年たちは全員南京市革命委員会から配られた綿入れのコート「綿大衣」に身を包まれていた。

オトク旗政府所在地のウラーンバラガス鎮の北十数キロ先まで、出迎えのモンゴル人の行列があった。「赤い小枝」とよばれる文芸工作団も道沿いに歌や踊りを披露していたが、早速、南京の知青たちの中からそれに加わる人がいた。知識青年たちの目には、内モンゴルの大草原には都市部のような「武闘」の血生くさはなかったかのように映った。

オトク旗に到着した翌25日、青年たちは各人民公社に再分配された。

アルプス人民公社: 157人

チャブ人民公社: 123人

マラト人民公社: 3人

……

梁麗蓉はチャブ人民公社に配属された。ここには南京市建邺区出身の人が多かった。

また、オトク旗と隣接するウーシン旗にも200人が派遣された。

4-3) 農牧民と結合する道

オトク旗チャブ人民公社に着いてから、さらに再分配をうけた。梁麗蓉はほかの13人とともにバヤントロガイ大隊に行くことになった。大隊は14人のために7間の固定建築を建て、二人一部屋という良い待遇だった。しかし、労働は厳しかった。真冬にチャガン・ダライ、オルン・ブラクなどの地に行き、「大修水利」というダム建設に参加した。

当時、「農牧民と結合する道」を歩まなければならない、と指導されていた。牧民の家に行くと、まず、毛主席語録を取り出して胸に当てながら「敬祝毛主席万寿無疆!」と叫ぶ。相手は、「祝林彪副主席身体健康! 永遠健康!」と返事する。このようなやりとりを交わしてから普通の会話に入る。モンゴル人の牧民たちも朝には毛主席の肖像画に「請示」し、晩にはまた一日の思想変化と労働状況を「汇报」しなければならなかった。

10月30日にはバヤントロガイ大隊で「牛鬼蛇神を批判闘争する大会」が開かれた。男性知青たちの何人かは動員させられて、「牛鬼蛇神」とされるモンゴル人をなぐった。しかし、女性知青たちは怖くて何もなかった。批判闘争大会のときにはいつも「念文件」、つまり、党中央の指示文書を読む係りとなっていた。

「知青たちのほとんどが出身の悪い人だった。しかし、彼らの中には、ここに来て、自分たちの革命意思を草原の人々に示そうとして牛鬼蛇神をなぐった人もいたが、大半の者は、南京市で打倒され、残されていた両親のことを思い出して、批判闘争には加わらなかった」、と梁麗蓉は回想する。

梁麗蓉はやがてモンゴル人の青年ゲシクダライと知り合った。ゲシクダライの父親は「反動的な国民党の党员」で、典型的な「悪い階級」の出身だったため、知識青年たちとともにダムの工事に動員されていた。梁麗蓉も工事現場で「反動分子」の息子ゲシクダライと知り合い、恋に落ちた。

二人は1970年に結婚した。結婚式は挙げなかった。結婚式は、「四日」とされて禁止されていた。ゲシクダ

ライ家の財産は没収されて、フトン二つ以外何も残っていなかった。二人は大隊本部から40元のお金を借りる。酒を2本買い、知識青年たちの仲間を呼んで、うどんを食べて、新しい人生のスタートを祝った。式の時、義母はモンゴルの習慣にしたがって、チャガン・ソプトという美しい名前を南国からの嫁につけた。

「モンゴル人は漢人が大嫌いでしょう。でも、私たち南京知青はなぜか、嫌われていなかった」と梁麗蓉は当時を振り返る。

結婚してから、梁麗蓉はダムの工事から解放されて、義母と二人で人民公社の家畜を放牧することになった。夫のゲシクダライと義父はあいかわらず工事現場で労働していた。義母はまったく漢語が話せなかった。そこで、梁麗蓉のモンゴル語は飛躍的にうまくなっていった。モンゴル語を上手に話せることは、「真に農牧民との結合の道」を歩んでいる証拠とされていた。

知識青年たちの上山下郷運動も下火になり、1972年から「回城風」がはじまった。青年たちは都市にもどろうとして、使える手段はすべて使った。病気と称したり、都市の人ならば誰とでも結婚したりして戻る道を探した。梁麗蓉は何回か「工農兵大学」や畜牧学校への入学を推薦されたが、自分が一番苦しかったときに優しく接してくれた義母らのことを考えて、進学も断念した。そのような梁麗蓉をオトク政府は「得がたい人材」とし、1977年から、梁麗蓉はバヤントロガイ大隊の小学校の教師に任命された。3年後、28歳のときに信用組合の職員になって、現在に至る。

4-4) 下放先の違い

梁麗蓉によると、彼女の弟は南京市から雲南に下放されていた。地獄のようなひどい生活だった、と弟がいつも話していたという。中国では1980年代半ばから「知青故事」という知識青年たちの下放生活を描いたドラマや映画が多数上映されるようになった。

「雲南や東北地域へ下放された知青たちが経験した地獄のような悲惨な生活を私はいつも信じられない気持ちで見ている」と梁麗蓉は話す。「内モンゴルは良かった。モンゴル人は私たちに本当に優しくかった。だから、最後まで続けられた」と彼女は強調する。

1061人いた南京知青のうち、現在のオトク旗には8人の女性と2人の男性の計10人残っている。8人の女性のうち、3人が現地のモンゴル人と結婚している。男性は1人がモンゴル人の女性と暮らしている。

「私、モンゴル人女性ができる仕事なら、何でもできる。乳製品づくりもうまいよ」と梁麗蓉は話しながら、私にミルクティーを勧める。

「細かい数字まで覚えているのは、毎日、ヒツジを数えていたからよ」

梁麗蓉はすっかりモンゴル人になっていた。

5. 革命隊伍の捨て子たちが創った民族間関係

冒頭でも述べたように、社会主義制度成立直後の1950年代から1970年代末にかけて、合計約1700万人の都市部の知識青年たちが農村・牧区へ強制移住させられた。彼らの中には北京市の曲折のように、本気で貧農・貧牧から再教育を受け、満胸の熱血で広闊大地たる農村と牧区を社会主義の新天地に改造しようとした者もいただろう。

しかし、南京市からの1061人はちがっていたかもしれない。彼らは「四多分子」からなっていた。「四多」とは、「長男長女が多い。継父・継母が多い。知識分子家庭出身者が多い。悪い家庭の出身者が多い」ことを指していた(樊思 1993:43)。別の知識青年も「南京知青の多くは紅衛兵組織に入れなかったく犬ころ」だった」と回顧している(王小玲 1993:152)。つまり、彼らの多くは長男長女として政府から各家庭に割り当てられた上山下郷の「任務」を担わなければならない地位にあった。そして、社会的には知識人のように「出身階級」が悪く、「革命の隊伍」に加われなかった人たちである。南京市にいたときは「武闘」に巻き込まれ、造反派に打倒される対象だった。要するに、極左路線でマス・ヒステリア(大衆狂乱)に陥っていた当時の中国では、彼らはいわば「紅い潮流」から捨てられた青年たちであった。そのような彼らは、沙漠の多い内モンゴルに活路を求めて草原にやってきた。

彼ら自身の言葉を使えば、モンゴル人は彼らを暖かくうけ入れた。出身ゆえに都市部では差別され、「武闘」では命を落としかねない彼らにとって、内モンゴルのオールドスはまさに安住の地だった。

モンゴル人も当時、いやおうなく毛沢東ら中国共産党が発動した文化大革命に巻き込まれていた。内モンゴルでは「内蒙古人民革命党」が反革命組織とされ、民族のエリートたちは少なくとも34万6000人ものが冤

罪を蒙り、1万6200人が「内蒙古人民革命党党员」か「日本の特務」との罪を着せられて虐殺されていた²⁾ (楊 1995:197-198)。

南京からの知青たちの中には内モンゴルでの文化大革命に熱心に参加した者もいなかったわけではない。ある知青は次のように書いている(樊 1993:47)。

思想の単純な貧農・貧牧出身者の子弟や、出身身分の良い人民公社の社員たちは悪い階級出身の「四類分子」に暴行を加え、彼らにもっとも苦しく、もっとも疲れる仕事を与えることで自らの政治上の優越性と確固たる階級上の立場を示す最高の手段と思っていた。我々のように革命とは何かも知らずに、また、革命に憧れる「革命の小青年」たちも、階級闘争の意識を高めようとして、まちがった模倣をしてしまった。

しかし、彼らの多くは、自身の出身の「悪さ」を自覚し、虐殺と批判闘争に加担しなかった。というのも、いくら「積極革命」しても、所詮は「革命の隊伍」から除外された集団であることを自覚していた。たとえば、オトク旗モガイト人民公社の14人の知識青年たちはすべて「出身が悪かった」ことを認識し、「内モンゴル人民革命党」の闘争会には消極的だった(辛 1993:103-108)。

モンゴル人も、しばらくしてから彼ら南京の知青は都市部の革命の既得利益者から追い出されたグループであることを察知したのである。察知したあとも、そうっとしておいてあげた。ある知青は書いている(曹 1993:220)。

父は牛小屋に入れられた。生別死離の権利すら私になかった。私は心に深い傷を負いながら大草原に來たものである。牧民たちは純朴善良、豪快磊落な精神で私をうけいれた。彼らからみれば、私の顔には「黒邦の子弟」の烙印もなく、彼らと同じような人間なのである。彼らと一緒にいるあいだ、私は尻尾を巻いて暮らす必要はまったくなかった。

不本意ながらも真の民族自立の道を失い、社会主義多民族国家内の少数民族の地位を与えられたモンゴル人たちと、革命の陣営から「上山下郷」という美辞麗句で追放された知識青年たちと、異なる歴史を背負った二つのマイノリティが特殊な時代に出会ったのである。そこで、両者は「同病相哀」のような、歴史上に見られなかった、まったく新しいモンゴル・漢の民族関係が、一時的に形成されたのである。

1911年に清朝が崩壊したあと、内モンゴルのモンゴル人たちもモンゴル高原の仲間たちと合流し、モンゴル人の国家を創ろうとした。紆余曲折を経て、彼らは結局、中国に留まらざるを得なくなった。そのためだけではなからうが、モンゴル人はどうしても漢人が好きになれない、と誰もが考えている。

鍬や鋤を担ぎ、物乞い茶碗をもってモンゴル草原に入っては処女地を開墾し、沙漠化をもたらす陝西、山西、河北のような、内モンゴルと歴史的に長く接触してきた地域の漢人農民とちがひ、南京の知識青年たちとモンゴル人のあいだには根本的な利益衝突はなかった。彼らは都市部から、「知識」をもってきた人びとだと理解されていた。「知識」あるゆえに、彼らも本気でモンゴル語を学び、そして、うまくなった。歴史上、知識青年たちほどモンゴル語をうまく話せた漢人はいなかったにちがいない。

「知識青年たちは、唯一、モンゴル人が好きになった漢人たちだ」、と草原のモンゴル人たちはいまでもそう語る。

註

1) 高錦明はもともと「呼和浩特市紅衛兵革命造反第三司令部」の責任者で、のちに内蒙古自治区革命委員会の副主任になる。騰海青、吳涛とともに内モンゴルの「三頭立ての馬車」としてその名を轟かせ、数々の冤罪・虐殺に加担した。

2) 最近のある研究は、「内モンゴル人民革命党」事件で惨殺された人は、「名前が分かっている者だけでも五万人あまり」になる、としている(呉 2006:110)。

参考文献

- 王小玲 1993 「巴音温都爾的歌仙們」『難忘鄂爾多斯』編集委員会『難忘鄂爾多斯』pp.152-156、南京：南京大学出版社。
- 呉迪 2006 「〈内人党〉大虐殺の顛末」宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺』pp.109-176、東京：原書房。
- 辛協 1993 「去監獄提審犯人」『難忘鄂爾多斯』編集委員会編『難忘鄂爾多斯』pp.103-106、南京：南京大学出版社。
- 曹愷 1993 「庫計生活両題」『難忘鄂爾多斯』編集委員会編『難忘鄂爾多斯』pp.217-220、南京：南京大学出版社。
- 戴佐農 1993 「“始作俑者”自述」『難忘鄂爾多斯』編集委員会編『難忘鄂爾多ス』南京：南京大学出版社、pp.7-11。
- 定宜庄 1998 『中国知青史—初瀾』北京：中国社会科学出版社。
- 樊思 1993 「和労改隊在一起的日子」『難忘鄂爾多ス』編集委員会編『難忘鄂爾多ス』南京：南京大学出版社、pp.43-49。
- 劉小萌 1998 『中国知青史—大潮』北京：中国社会科学出版社。
- 劉小萌 2004 『中国知青口述史』北京：中国社会科学出版社。
- 黎亜明 1993 「起步」『難忘鄂爾多ス』編集委員会編『難忘鄂爾多ス』南京：南京大学出版社、pp.3-6。
- 『難忘鄂爾多ス』編集委員会編 1993 『難忘鄂爾多ス』南京：南京大学出版社。
- 楊海英 1995 「内モンゴル人民革命党」松原正毅編『世界民族問題事典』東京：平凡社、pp.197-198。

『難忘鄂爾多ス』(1993)が記す南京市知識青年たちの出身

氏名	両親・兄弟の罪と下放当時の状況	オルドスにおける下放先	出典	備考
張三力	父が南京師範学院院長、黒邦		P10	
戴佐農	父が刑務所、母は清掃婦	オトク旗モガイト公社	P10	
張秀岩	家庭に政治問題	オトク旗アルプス公社	P31	
樊斯	出身が悪く、紅衛兵になれなかった	オトク旗アルプス公社	P43	
ミンガイ大隊の14人	文革の審査対象	オトク旗モガイト公社	P104	
単建生	敵のNHK放送を受信した	ウーシン旗トリ公社	P144	
王小玲	狗崽子、黒五類	オトク旗アルプス公社	P152	
呉康寧	父母が走資派、隔離審査	オトク旗チャブ公社	P219	
曹愷	黒邦子弟	オトク旗アルプス公社	P220	
李曉雲	父は文革の審査対象	オトク旗アルプス公社	P246	
S君(邢天佑妻)	出身が悪い	オトク旗	P362	
呉浩武	父母に政治問題	オトク旗アルプス公社	P393	行方不明
朱明德	母親早死、父親政治問題あり	オトク旗エルケト公社	P422	
李大双	オルドスで逮捕	チンギス・ハーンの肖像を隠し持ち	P428-433	
賈余慶	出身が悪い	オトク旗チャブ公社	P441	72.12.29自殺
小金	父母が国民党高官	オトク旗モガイト公社	P453	
金解放	出身家庭悪い	オトク旗モガイト公社	P455	
常葆	父親に政治問題	オトク旗ブラク公社	P460	
朱元智	出身家庭に問題	オトク旗スミト公社	P517	
王正強	父親は国民党軍人、母親は右派	オトク旗アルプス公社	P557	